

# 世代別人口の増減から見る美山町の特徴

## The feature of Miyama-cho seen from the change of the population by age groups

長 光 太 志

### 要 旨

本論は、南丹市の公開する人口データを利用して、南丹市美山町を対象に、人口増減分析を実施する。こうした分析を企図するのは、美山町が、地域活性化やエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムに関心のある多くの研究者によって分析の対象とされながら、未だ、政府の公式統計を利用した分析が手薄だからである。そこで本論では、美山町のエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムの取り組みが、実際の人口増減に影響を与えている可能性について上記の手法を通じて検討する。人口増減分析は、「美山町の属する南丹市の他町との比較」および「美山町内の5地区の比較」という2つの観点から実施される。分析の結果、現状の美山町のエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムの取り組みは、「町全体の人口の増加」や「若年世代の定住化」に貢献しているとは言い難く、どちらかと言えば30代以上の流出を抑制している可能性が高いことが分かった。

キーワード：南丹市美山町、エコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズム、人口増減分析

## 1. はじめに

### 1.1 本論の目的

本論は、南丹市の公開する人口データを利用して、南丹市美山町を対象に人口増減分析を実施することを目的としている。こうした分析を企図するのは、美山町が、地域活性化やエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズム<sup>1)</sup>に関心のある多くの研究者によって分析の対象とされながら、未だ、政府の公式統計を利用した分析が手薄だからである。

政府の公式な統計から対象にアプローチする研究は、往々にして対象の外縁や形式的な側面の記述だけに留まる場合も多いが、そうであるが故に、その後の研究の基礎的な認識枠組みを提供できるとも言える。後述するように、美山

町を対象とした研究においては、対象の質的実を問う研究が先行研究として豊富に提出されているため、むしろ本論のようなアプローチにも一定の意義があると考えた。

### 1.2 美山町の概要

南丹市美山町（旧・北桑田郡美山町）は、京都市内から国道162号線で約56キロ離れた京都府の中部に位置する中山間地域で、町面積の約97%（331.47km<sup>2</sup>）が山林に当たる地域である。2006年に周辺4町（園部町、日吉町、八木町）と合併して南丹市となった。美山町の名称は、南丹市の行政区の地名として使用されている。また、その他の中山間地域と同様に、少子化や過疎に悩まされており、中井（2014）によれば、2001年時点の高齢化率（65歳以上の人口

に占める割合)が32.6%であった。かつての主要産業である薪炭・林業などは1970年代を境に低迷しており、山間部という立地から農家の経営規模も小さい。一方、日本の原風景の1つとして評価される「かやぶきの里」(重要伝統的建造物群保存地区「美山町北」)や国定公園化の動きも具体化している京都大学芦生研究林など、独特の地域観光資源に恵まれており、1993年の「重要伝統的建造物群保存地区選定」以降は、観光入り込み客が顕著に増加している。また美山町としても、こうした観光資源を、意識的にエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムといった「ふるさと観光」の系譜にも位置付けられる新たな観光スタイルとして提示し、2001年の「優秀観光地づくり国土交通大臣賞金賞」や2005年の毎日新聞主催の地方自治大賞などに選ばれ、まさに観光で地域活性化を図る際のお手本のような存在となっている。

## 2. 先行研究の検討

南丹市美山町は、日本の中山間地域活性化のモデル地区の1つとして、これまで多くの研究者の耳目を集めてきた。その切り口は様々であるが、美山町が目される理由の1つとして、その「村おこし」「地域おこし」の手法が挙げられるだろう。美山町は、これまでネガティブに捉えられることの多かった「田舎」というイメージを、むしろ「日本の原風景」としてポジティブにブランディングし、地域振興策として一定の成果を収めたのである。こうした美山町のやり方は、特に、中山間地域の地域振興策として評価が高まっているエコ・ツーリズムないしグリーン・ツーリズムや、その実践を可能にする地域関係の在り方と言った観点から見た際に、興味深い事例であった。そのため、美山町を題材とした研究群の中でも、こうした地域振興の在り方を論ずるものが1つの潮流を成すことになる。そこで、本章でも、まずこうした研

究群の中から、代表的なものを選び出し、その成果と課題を確認しておきたい。

### 2.1 初期の美山研究の動向

美山町とエコ・ツーリズムないしグリーン・ツーリズムを関連させて分析する研究は、1990年代の半ばには散見されるようになる。例えば、当時、美山町で実践された、残存する「茅葺き民家」を地域で大切に保存し整備を進める事業に着目した小馬(1996)の研究や、グリーン・ツーリズムの取り組みと都市民の余暇活動のニーズを関連させて論じた神吉(1996)の研究がそうである。これらは、大雑把にマッピングするなら、美山で展開され始めた新しいツーリズムを評価していく志向を持つ研究であった。

こうした美山で行われているエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムに属する地域活動やその背景に見える地域構造を積極的に評価していくという研究のトレンドは、後発の研究群にも踏襲されることになる。例えば、岩松の一連の研究——美山の集落とグリーン・ツーリズムの関わりを検討した研究(岩松 1999)や、同じく美山の集落が行った地域文化の保存について分析を加えた研究(岩松 2000)、あるいは山村集落の活性化に関する合意形成と住民リーダーの在り方を検討した研究(岩松 2001)——などは、その典型であろう。また他にも、アグリビジネスの観点から美山町の活動に注目する中村貴子(2003)の研究や、グリーン・ツーリズムを通じた農林業の振興を検討する浮谷(2004)の研究も、広い意味では、こうしたトレンドの範囲内の研究であると言える。

### 2.2 中期の美山研究における展開

しかし2000年代の半ばになると、美山地域のこうした取り組みを、異なる角度から分析する研究も現れ始める。そこでは、美山町におけるエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムの取り組みを一定程度評価しながらも、その成立背

景に潜む課題に関する考察が展開された。こうした研究の特徴の1つは、民族学の分野で行われていた、「田舎」や「農山村」に対するノスタルジア研究の成果を、美山町の取り組みを解釈する際に参照したことであろう。例えば、農山村で行われる新しいツーリズムが、戦後の農村・農家を封建的なものと位置付けて行われた「生活改善運動」に対する大きな転換を意味することを指摘した中村淳（2007）の研究や、高度成長期を境に、「中央」「都市」といった領域へ広がった「物質的豊かさ」を基盤とする西欧的・文化的で「新しいもの」に囲まれた生活が、むしろ、「古いもの」しかない「地方」「農村」に「精神的豊かさ」を憧憬させ、それが「ふるさと観光」として定位されたことを指摘する川森（2001）の研究が、美山町の取り組みを解釈する際の基礎的な共通認識となる。

さらに、こうした認識を前提として、観光資源としての農山村が、所与の、あるいは本質論的な存在ではないことを指摘する研究も盛んに参照されることになる。例えば、青木（2007）は、表面的に伝統的に見える文化であっても不断に変化し続けており、それをあたかも固定的なもののように捉え観光資源化する背景には、行政・観光業者・地域住民による商品化戦略が働いていることを指摘する。また、大田（1993）は、かなり早い段階で、観光戦略の展開過程で不可避に起こる伝統文化のパッケージ化や改変を、「中央」「都市」が「地方」「農村」に対して注ぐ一方的な「まなざし」を、「地方」「農村」の側が、観光という力関係の網の目を利用することで、自分たちの文化として脱構築し操作可能な対象に再編成する「文化の客体化」であるとの見方を提出している。

上記のような民族学において蓄積された知見を踏まえて、これまでとは異なる方向性の美山研究が提出されることになる。例えば、湯川（2006）は、美山町のエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムにおいて中核的で象徴的な意味

を持つ北集落の「茅葺き民家の景観」が、観光資源化されるに当たって、地域の住民が抱えた葛藤を丁寧に聞き取っている。湯川の聞き取りに寄れば、それまで美山地域の中では、茅葺き民家は、貧しさや後進性の代名詞であったという。そのため、住民にとって、茅葺き民家は、「奥地の人間としての屈辱」を喚起させるものであり、当然のこととして、その観光資源化に際しては「貧乏を見せ物にするのはどうか」という声が上がったという。こうした意識に変化が生まれるのは、美山の地域の中でも厳しい環境に置かれていた北集落の住民が、生活のために美山の外に出て後、帰郷した時である。湯川（2011）によれば、帰郷者たちは、美山の外部、特に都市部での公務員や教員を経験することで、出身地域の景観に対し、「これだけのもんが遺ってんのはここくらいしかないかなあ」という意識を獲得する。こうして、帰郷者たちは、美山の外部で得た「都市のまなざし」を契機として、自らの集落の景観を再評価し、茅葺き民家を観光資源化する際の推進力の一翼を担う事になる。こうした美山町のエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムの成立の背後にある歴史的経緯や社会構造を、民族学の知見を利用して丁寧に追っていく研究の整理は、中井（2014）にも、詳しく記されている。

## 2.3 美山研究の新たな潮流

さて、2010年代に入ると、美山町のエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズム研究にも、さらに新しい視覚が加わり始める。これまでの研究群が、エコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムを直接の対象にした分析であったのに対し、この時期の研究群では、エコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムとIターン・Uターンとの関連性にも目を向けた研究が目立ち始めたのである。そこでは、特に、Iターン・Uターンといった、外部ないし一度美山町を離れた人材が、なぜ美山に再参入するのか、また彼らが地域に与

える影響はどのようなものかといった観点が重要視されることになる。例えば、松田（2014）は、美山のIターン者に注目し、詳細な聞き取り調査を通じて、その実態を描き出す。この松田の聞き取りによれば、美山町のIターン者は、職業選択や生活信条を重視する者が多く、その実現のために美山町を選んでいることや、自らを「よそ者」と自覚するが故に地域に溶け込む努力を惜しまず、同時に美山町の状況を相対化して捉え、公共的な観点から社会活動を行うことが多いという。また、関谷・大石（2014）も、独自の聞き取り調査から、Iターン者が、中山間地域の地域振興や地域課題の解決を図るソーシャル・イノベーターとしてのマインドを備えており、彼らを活用するためにも、既存の住民自治組織を再編成し、社会的活動を意図したプロジェクトが具体的に実践されるような実働型のプラットフォームを構築する必要性を説いている。こうした調査研究の副産物として見えてくるのは、Iターン者の諸活動が、まさに美山町のエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムの一翼を担う場合が多いという美山町の実情である。これは、Iターン者の生活信条と、美山町で行われている諸活動が、理念において重なりを持つこと示唆している。そして、こうしたIターン者に注目する一連の研究には、美山町のエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムの取り組みが、「美山町の新規住民を増やすのか」といった潜在的な問いが含まれていると見なし得る。なぜなら、Iターン者が研究対象として注目される背景には、人口減少が激化する中山間地域に新規参入する人々の特徴や傾向を捉えたいというニーズが存在しており、それが美山町をフィールドとして展開される際には、美山町の他地域ではあまり見られない特徴の1つである「エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムの一定の成功」という要因と関連付けて考察されざるを得ないからだ。その意味で、松田や関谷・大石の研究は、美山町のエコ・ツーリズ

ムやグリーン・ツーリズムの取り組みと「美山町の新規住民」の間に、質的な関連性があることを描き出しているとも言える。

さて、ここまで、美山町のエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムに関する研究動向を整理してきた。当初は、新しく生まれた美山町のエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズム、あるいはそれを可能にした美山地域の社会関係を積極的に評価する研究が多く提出され、その後、この現象の背景にある「中央」「都市」と「地方」「農村」という権力関係を意識してエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムの再評価がなされるようになった。そして、2010年以降は、それらを踏まえて、エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムが、美山町の地域振興、特に新規住民の獲得にどの程度貢献しているのかを検討する研究が台頭してきている。本論でも、先行研究のこうした展開を意識したうえで、先行研究では手薄になっているアプローチに取り組みたいと考える。それは、客観的な統計データを利用して、人口増減から美山町の特徴を記述するというアプローチである。これまで見てきた通り、美山町を対象とする研究は、美山町のエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムを直接の題材とした研究から、その貢献度を、新住民の獲得といった観点に即して探る研究にシフトしつつある。しかし、エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムの研究は、主に質的な方向からアプローチされることが多く、この傾向がエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムとIターン者・Uターン者との関わりを論じる研究にまで引き継がれている。美山町で行われたIターン関連の量的な研究としては、金澤（2012）がIターン者に関するアンケート調査とその報告を行っているのみである。そこで、本論では、南丹市の公式統計を利用して、美山町の特徴を世代別人口増減分析の観点から記述してみたいと考えている。こうした政府統計を利用した美山町の特徴の記述は、エコ・ツーリズムやグリーン・



ツーリズムとIターン者やUターン者の関連性を検討する研究を進める上で必要となる議論の共通基盤を作成するだけでなく、一般的な美山研究にとっても有用な基礎的認識を構築する際の一助となる。

### 3. 分析手法と使用するデータ

#### 3.1 分析手法

世代別人口増減分析の観点から美山町を分析するにあたって、その基本的な方法は、根本(2013)が提唱している方法を採用する。根本の提唱する方法は、以下の通りである。まず対象地域の国勢調査などのデータから、2つの時点(例:2010年と2015年)のデータを取得する。次に、それぞれのデータを、5歳刻みで年齢別(0~4歳, 5~9歳, 10~14歳, 15~19歳, 20~24歳, 25~29歳, 30~34歳, 35~39歳, 40~44歳, 45~49歳, 50~54歳, 55~59歳, 60~64歳, 65~69歳, 70歳以上)の人口階級を作成する<sup>2)</sup>。最後に、新しい年代(例:2015年)の「ある年齢階級の人口」から、古い年代の(例:2010年)の「ある年齢階級の人口」を引く。この時、それぞれ「選択される年齢階級」は、新しい年代と古い年代の差——2015年と2010年であれば5年——を意識し、新しい年代で選ばれた階級から、「年代の差」を差し引いた年齢階級が、古い年代から選ばれる事になる——例えば、2015年で「20~24歳」の階級が選択されている場合は、5年の年代の差があるため、2010年では「15~19歳」の年齢階級が選ばれる<sup>3)</sup>。こうすることで、当該の年齢階級に属する人間が、ある時点から次の時点に移行する間に、どの程度、その地域から移動したかが浮き彫りとなる。単純に言って、誰もその地域から出て行かず、誰もその地域に入って来なければ、世代別人口増減表を作成した場合、当該の年齢階級に当てられる数値が「0」になるのである。逆に「+10」が当てられれば、その年齢階級にお

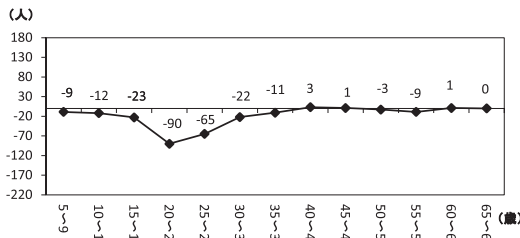
いて、地域から出て行った人と地域に入ってきた人の差し引きがプラス10名だったことを意味し、「-10」が当てられれば、地域から出て行った人と地域に入ってきた人の差し引きがマイナス10名だったことを意味する。根本の、この分析手法は、プリミティブではあるが、その分、地域の人口増減の実態を赤裸々に反映するものとなっており、本論の問題関心に適した分析手法であると言える。

#### 3.2 使用データの選択理由

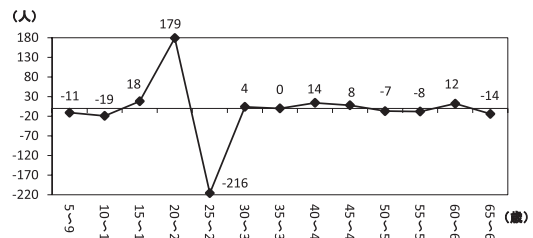
分析手法の説明を終えた所で、使用するデータについても言及しておきたい。分析手法を参考にした根本(2013)の世代別人口増減分析では、国勢調査のデータを使用して考察を進めている。しかし本論では国勢調査を用いず、南丹市のHP(南丹市 2010・2015)で公開されている2010年と2015年の年齢別人口集計表を利用して人口増減分析を行う。国勢調査では無く、南丹市の公開データを使用する理由は、本論の分析が成された時期と関連している。本論の分析は2015年に行われている。この年は、国勢調査の実施年であり、そのため公開されている最新の国勢調査のデータは5年前のものになる。本論の年齢別人口増減分析は、試験的な意味合いが強く、そのため、まずは現状の把握を優先するべきだと考えた。この観点に即すと、分析に使用されるデータは、可能な限り新しいものを使用した方が望ましいことになる。幸い南丹市は、2010年4月時点から、毎年、年齢別人口集計表を公開しており、これは本論で行う年齢別人口増減分析に耐えるものであった。加えて、南丹市のデータが初めて公開されてから本論の分析が行われるまで5年の期間があり、丁度、根本と同じ5年間隔の年齢別人口増減分析が可能となる。この意味でも、国勢調査のデータでは無く、南丹市の公開データを選択することに無理はないと考えた。これが本論における使用データの採用理由である。

## 4. 人口増減分析の結果

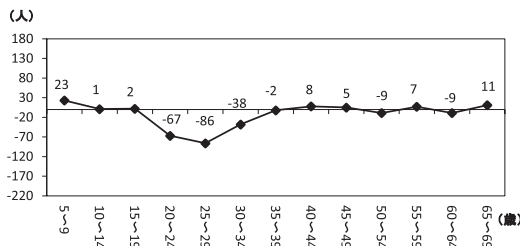
本論で行う人口増減分析の結果の記述は、2つの観点から作成される。1つは、南丹市内の他の地域と美山町を比較する人口増減分析、もう1つは美山町内の5つの地区を比較する人口増減分析である。前者は、同じ市内の他地域との比較から美山町の特徴を記述することを目的としている。後者は、美山町の内部で、それぞれの地区にどのような特徴があるのかを検討する分析である。なお年齢別人口増減分析は折れ線グラフの形式で表記する。図1から図4が南丹市内の他の地域と美山町との比較であり、図5から図9までが、美山町内の各地区の比較に対応している。また、グラフの縦軸は、2010年から2015年に掛けて増減した人数を表し、横軸は5歳刻みの年齢階級を表している。加えて、当該の町や地区が、分析の対象となる期間に、人口を「増加させたのか、減少させたのか」を分かり易くするため、人口の増減「0人」のラインに補助線を引いておいた。



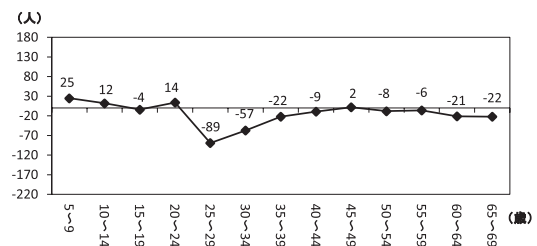
注) 図は南丹市(2010・2015)より筆者が作成  
図1 美山町の年齢別人口増減分析



注) 図は南丹市(2010・2015)より筆者が作成  
図2 園部町の年齢別人口増減分析



注) 図は南丹市(2010・2015)より筆者が作成  
図3 日吉町の年齢別人口増減分析



注) 図は南丹市(2010・2015)より筆者が作成  
図4 八木町の年齢別人口増減分析

### 4.1 美山町と南丹市内の他町との比較

南丹市は、京都府の中部にある丹波地方に属する市である。2006年に、船井郡園部町・八木町・日吉町、北桑田郡美山町が合併して成立した。成立から10年程度しか経過していないため、現在に至っても、合併前の地域特性を一定程度保持していると思われる。2015年段階の南丹市の総人口は33,207名で、各町別の人口は、美山町が4,197名、園部町が16,103名、日吉町が5,184名、八木町が7,723名である（南丹市 2015）<sup>4)</sup>。本節では、まず美山町とその他の南丹市内の各町の年齢別人口増減分析を実施し、美山町の特徴を、他の地域との比較を通じて記述したい。

図1から図4までが美山町を含む南丹市の各町の年齢別人口増減分析である。まずは、20代未満の人口増減を比較してみよう。20代未満の人口増減は、美山町で44人の減少、園部町で12人の減少、日吉町は26人の増加、八木町が33人の増加である。ここから分かるのは、他の地域に比べて、美山町の20代未満の人口減少が顕著であるということである。それでは次に、20代の人口増減を見てみよう。

20代の人口増減を一見して分かるのは、園部町の人口増減の特殊さである。南丹市の大半の町で、共通して見られる傾向は、20代人口の減少である。美山町では155人の減少、日吉町では153人の減少、八木町では75人の減少が見られ、押しなべてこの世代の流出が顕著である。一方、園部町は37人の減人と、他地域に比べて20代人口の減少が少ない地域となっている。ただし、この数値は、20代前半の激増と、20代後半の激減の合計として表れている数値で在り、この20代人口の極端な増減が園部町の特徴である。こうした現象が起こるのは、園部町が、京都医療科学大学や京都建築大学校・京都伝統工芸大学校などの教育機関を擁している影響で、入学に際して20代前半人口の増加が、卒業に際して20代後半人口の減少が進むからだと考えられる。そして、こうした入学・卒業の結果として見えてくる園部町の20代人口も減少傾向にある以上、南丹市は全体として20代の減少に苦しんでいると言える。本論の関心に即して言うと、この傾向に美山町も準じており、そこに美山独自の傾向は観察できない。それでは、次に、30代の人口増減について検討しよう。

30代もまた減少傾向が顕著な年齢階級である。ただし、減少の度合いに若干の地域差が現れている。例えば、園部町は、30代の人口が4人増加している。一方、美山町は33人の減少、日吉町は40人の減少、八木町は79人の減少である。そのため、園部町だけが何とか現状を維持している一方で、南丹市全体としては、30代の減少傾向が表れていると言える。これらの結果から、この年齢階級でも、美山町独自の傾向は観察されない。次は40代の人口増減を比較してみよう。

南丹市の各町の40代の人口増減を見てみると、美山町で4人の増加、園部町で22人の増加、日吉町で13人の増加、八木町で7人の減少となっている。ここから、30代までに見られた減少傾向と比して、南丹市全体として40代の人口は微増傾向にあることが伺える。ただし、この年齢

階級でも、美山町に独自の傾向は観察されない。次は、50代の人口増減を比較してみよう。

50代の人口増減を見てみると、美山町では12人の減少、園部町では15人の減少、日吉町では2人の減少、八木町では14人の減少である。この結果からは、日吉町が何とか現状維持を示したものの、南丹市全体として、この世代もまた、人口が減少する傾向を示している。そして、この年齢階級でも、美山町に独自の傾向は観察されない。

最後に、60代の人口増減について見てみよう。美山町では1人の増加、園部町は2人の減少、日吉町は2人の増加、八木町では43人の減少である。八木町が極めて高い人口減少を示しており、その理由は現状では不明である。一方、他の地域は、微増微減に終始しており、現状維持の印象が強い。美山町も、こうした傾向に埋没しており、独自の特徴は現れてこない。

最後に、「本論で言及した年齢層」を合算した場合の人口増減に触れておこう。2010年から2015年の間に見られた、南丹市各町におけるこの年齢層全体の人口増減は、美山町では239人の減少、園部町は40人の減少、日吉町は154人の増加、八木町では185人の減少である。ここに示されているのは、美山町の人口減少の深刻さである。人口の減少傾向としては、他町と同じトレンドを有する美山町であるが、人口減少の実数は、南丹市の中で最も多い。美山町の人口が、南丹市の各町の人口と比して少ない事を考え合わせれば、この数字の深刻さが浮き彫りになる。

さて、ここまで、人口増減分析を利用して、美山町と南丹市の各町とを比較してきたが、そこから見えてきたのは、美山町に独特な人口増減の傾向はあまり無いという事実である。後の節でより詳しく考察するが、これは美山町がエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムの観点から独特な地域活性化を図っているという事実から期待される結果とは異なるものである。そ

れでは、この結果を踏まえて美山町の内部比較に移ろう。

#### 4.2 美山町における5地区の比較

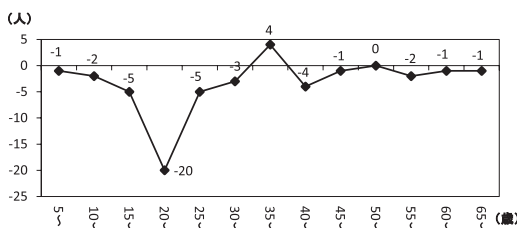
図5から図9までが美山町内の人口増減分析である。美山町の内部には、大野・知井・鶴ヶ丘・平屋・宮島の5つの地区が存在し。住民の地区アイデンティティは高いという特徴がある。2015年のそれぞれの地区の人口は、大野810人、知井695人、鶴ヶ丘779人、平屋837人、宮島1,076人である（南丹市 2015）。

それでは、各地区の世代別の人口増減を見てみよう。20代未満の世代の各地区の人口増減は、大野地区で8人の減少、知井地区で14人の減少、鶴ヶ丘地区で5人の減少、平屋地区で8人の減少、宮島地区で9人の減少である。これを見る

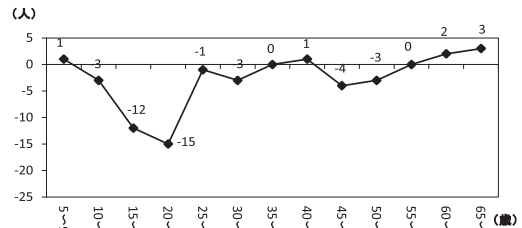
限り、20代未満の世代は、美山町全体として減少傾向にあることが分かる。次は、20代の人口増減を見てみよう。

20代の人口増減は、大野地区で25人の減少、知井地区で16人の減少、鶴ヶ丘地区で39人の減少、平屋地区で36人の減少、宮島地区で42人の減少である。20代未満の世代と同じく、この世代も美山町全体として減少傾向にある。ただし、「かやぶきの里」や「芦生の森」など美山町の代表的な観光資源が存在し宿泊施設も多い知井地区<sup>5)</sup>は、相対的に、この世代の減少が小規模で済んでいる印象がある。

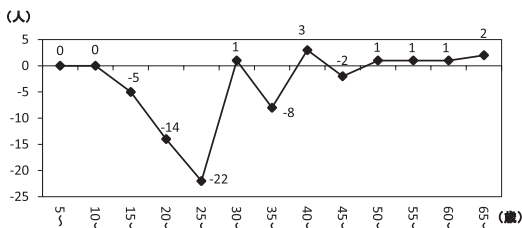
続いて、30代の人口増減は、大野地区で1人の増加、知井地区で3人の減少、鶴ヶ丘地区で7人の減少、平屋地区で14人の減少、宮島地区で10人の減少である。30代は、20代と比べれば、



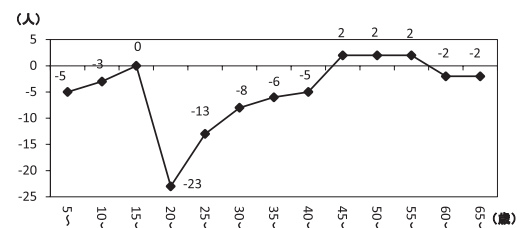
注) 図は南丹市(2010・2015)より筆者が作成  
図5 美山町「大野地区」の年齢別人口増減分析



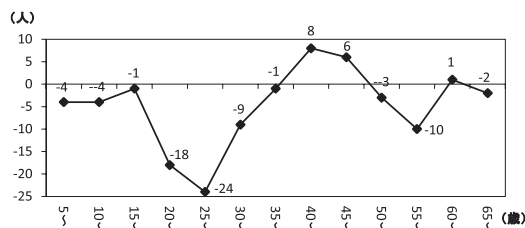
注) 図は南丹市(2010・2015)より筆者が作成  
図6 美山町「知井地区」の年齢別人口増減分析



注) 図は南丹市(2010・2015)より筆者が作成  
図7 美山町「鶴ヶ岡地区」の年齢別人口増減分析



注) 図は南丹市(2010・2015)より筆者が作成  
図8 美山町「平屋地区」の年齢別人口増減分析



注) 図は南丹市(2010・2015)より筆者が作成  
図9 美山町「宮島地区」の年齢別人口増減分析



世代全体として人口は減少しているものの、一部に若干の増加も見られ、人口の減少傾向は一先ず落ち着いた印象である。

次は、40代の人口増減について確認しよう。40代の人口増減は、大野地区で5人の減少、知井地区で3人の減少、鶴ヶ丘地区で1人の増加、平屋地区で3人の減少、宮島地区で14人の増加である。全体としては、各地域で微増微減が起こり、結果として現状が維持された印象である。また、宮島地区でのみ、顕著な人口増加が確認できる。宮島地区は、美山支所などが存在する、生活の場としての美山町の中心部である。こうした地区の特性が、40代という働き盛りの世代の人口増加に影響している可能性はあるが、現状ではその原因は不明である。

それでは、50代の人口増減を追ってみよう。50代の人口増減は、大野地区で2人の減少、知井地区で3人の減少、鶴ヶ丘地区で2人の増加、平屋地区で4人の増加、宮島地区で13人の減少である。宮島地区以外では、微増微減に終始し、全体としては現状を維持している印象である。ただ40代人口の増加を示した宮島地区は、50代において大幅な人口減少を示している。40代・50代を合わせて考えてみると、宮島地区の特徴の1つは、こうした人口増減の振れ幅の大きさにあると言える。

次に、60代の人口増減を見てみよう。60代の人口増減は、大野地区で2人の減少、知井地区で5人の増加、鶴ヶ丘地区で3人の増加、平屋地区で4人の減少、宮島地区で1人の減少である。60代に至ると、人口増減の幅はそれほど小さくなく、40代・50代と同様、微増微減に終始し、全体としては現状を維持している印象である。

最後に、「本論で言及した年齢層」を合算した場合の人口増減に触れておこう。2010年から2015年の間に見られた、各地区におけるこの年齢層全体の人口増減は、大野地区で41人の減少、知井地区で34人の減少、鶴ヶ丘地区で42人の減少、平屋地区で61人の減少、宮島地区で61人の

減少である。これらは、前節で確認したように美山町全体の人口減少傾向を表している。また、美山町の象徴的な観光資源を有している知井地区で、人口減少の程度がやや緩やかである点も押さえておきたい。

## 5. 分析結果の考察と課題

さて、本節では、人口増減分析の結果の考察と、そこから導き出される課題について言及しておきたい。南丹市美山町は、多くの研究者に注目される地域であるが、その理由の1つに、美山町が、地域活性化策として、先進的あるいは典型的なエコ・ツーリズムあるいはグリーン・ツーリズムを実践していることが挙げられる。事実、先行研究の中でも、エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムと関連させて美山町を論じる研究が、1つの潮流を成している。

こうした美山町の先行研究を整理すると、ここでは研究課題の変遷も見えて取れる。初期には、美山町のエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズム自体を研究の対象とし、その積極的評価やそれを可能にした地域構造を解明する研究が多く、中期には、エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムを、「都市と農村」あるいは「中央と周辺」の権力関係の中から再度解釈し直す研究が増えてくる。それが、最新の研究動向では、エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムが美山町にもたらす影響を、IターンやUターンの事例と重ね合わせて分析する研究が顕著になる。これは、中山間地域の地域活性化を考える際には、新規住民の獲得が重要なイシューとして上がらざるを得ず、美山町のエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムが、この問題とどのように関連しているのかを明らかにする必要があるからだ。

ただし、こうした観点から行われた美山研究は、主に質的な手法によって展開されてきた。これは、研究の段階が、まずは観察された事例

から考察を深める必要があった為であるが、同時に、政府統計などの客観性の高いデータを利用したアプローチが成されていないことも確かであった。そこで、本論では、南丹市の公表する2010年と2015年（南丹市 2010・2015）を利用して、人口増減分析を実施し、その結果を記述した。

人口増減分析は、南丹市内の各町と美山町の比較、美山町内の5地区の比較という2つの観点から実施している。そこから見えてきたポイントは2つある。1つは、人口の増減という観点から見た場合、南丹市の他の町と比して、美山町に際立った特徴がないということだ。これは、美山町のエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムの取り組みが、先進的であり、かつ地域のIターン・Uターン者の活動と一定の質的な関連性を持っているとは言え、他の地域と比して人口の増減に影響を与えるような要因にはなっていないということである。もう1つは、美山町の5地区を比較した場合、美山町における象徴的な観光資源を持つ知井地区で、人口減少の程度、特に30代以上の人口の減少がやや緩やかであるということである。これは、美山町のエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムが、若年世代の定住化や、美山町全体の人口増加には繋がらずとも、30代以上の人口減少を抑制する機能を果たしている可能性を示唆している。

こうした分析結果から、今後の美山研究には2つの課題が考えられる。1つ目は、エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムがもたらす影響の客観的な測定である。本論は、この点に関して、人口増減分析を使用して試論的に考察したに過ぎず、まだまだ客観性が高いとは言えない。今後、その他の指標や調査と突き合わせて、より冷静な評価が行われる必要がある。2つ目は、本論の分析結果が一定の事実を言い当てているのであれば、美山町のエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムの取り組みを、住民人口の増加、特に若年世代の定住化に繋げるための道筋の研

究である。今後の美山研究では、これらの研究課題に取り組むことが、地域への貢献とディシプリンへの責務を果たすための重要なポイントとなるだろう。

## 注

- 1) 近年、中山間地域の地域活性化を行う手法として、自然環境や地域の伝統文化などを観光資源として再定位し、観光による地域活性化を図る戦略が政府によって強く打ち出されている。その一環として、環境省は1990年からエコ・ツーリズムを推奨し、農林水産省は1993年からグリーン・ツーリズムを奨励している。
- 2) ただし、ここで作成した年齢階級のうち、「0～5歳」までと「70歳以上」は、分析に使用しない。前者の階級を採用しない理由は、本論の年齢別人口増減分析が2時点の人口の差に注目する分析であるが、論理的に言って、「0～5歳」以前の年齢階級は存在せず、本論の分析が行えないからである。また後者の階級を分析に含めないのは、人口減の大きな要因として死亡の蓋然性が高くなり人口減の理由が地域の特性を表し難いからである。
- 3) 根本は、解釈が容易である事と、国勢調査のデータから世代別人口増減表を作成する為、5歳刻みの年齢階級を所与のものとしているが、原理的に言うと年齢階級の刻み方は、使用するデータや解釈上の都合で、分析者が任意に設定できる。後に説明するように、本論では年齢階級の刻み方としては5歳間隔を採用しているが、使用するデータは総務省の国勢調査ではなく南丹市が公開しているデータである。
- 4) 本論で採用した人口増減分析では、基本的に、分析対象地域の人口規模によって分析結果にバイアスが働く可能性は少ないものと考えている。なぜなら、人口規模が大きな地域は、その規模故に、相対的に多くの住民が流入することが想定されるが、同時に、その規模故に相対的に多くの人口が流出する可能性も高くなる。こうして規模による増減量の多寡は相殺されて、純粋な増減関係だけが露わになるからである。
- 5) 美山町観光協会が作成する美山ナビによれば、各地区の宿泊施設数は以下の通り。大野地区3軒、知井地区12軒、鶴ヶ丘地区1軒、平屋地区3軒、宮島地区4軒。

参考・引用文献

- 青木隆浩, 2007, 「グリーン・ツーリズム政策は地域を守れるか」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館, 62-85.
- 堂下恵, 2004, 「グリーン・ツーリズムによる地域振興—京都府北桑田郡美山町の事例から」『農』277, 2-32.
- 岩松文代, 1999, 「グリーンツーリズムの展開と集落組織：京都府美山町北集落を事例として」『森林応用研究』8, 27-31.
- , 2000, 「地域文化の保存施策と集落の対応：京都府北桑田郡美山町の3集落を事例として」『森林応用研究』9(1), 37-43.
- 岩松文代・岩井吉彌, 2001, 「山村集落の活性化に関する合意形成と住民リーダー：京都府美山町における景観保存を事例として」『日本林學會誌』83(4), 307-314.
- 金澤誠一, 2012, 「『美山町におけるIターン者アンケート調査』報告書」美山産官学公連携協議会「Iターン・Uターン定住促進プロジェクト」.
- 神吉紀世子, 1996, 「グリーン・ツーリズムの取り組みと都市民の余暇活動ニーズの対応に関する研究—京都府美山町における入込み客と地元住民の意向比較—」『都市計画. 別冊, 都市計画論文集 = City planning review. Special issue, Papers on city planning』31, 109-114.
- , 1998, 「グリーンツーリズムの現状と課題—京都府美山町における入込み客／地元の意識調査から」『運輸と経済』58(2), 53-60.
- 川森博司, 2001, 「現代日本における観光と地域社会——ふるさと観光の担い手たち」『民族学研究』66(1): 68-86.
- 小馬勝美, 1996, 「京都府美山町における農村と都市の交流」『農業土木学会誌』64(8), 785-790.a2.
- 松田智子, 2014, 「Iターンという生き方：美山への移住者を事例として」『佛教大学社会学部論集』58: 149-162.
- 美山町観光協会, 2012, 「京都府南丹市美山町美山ナビ」, (2016年1月17日取得, <http://www.miyamanavi.net/>).

- 中井治郎, 2014, 「〈ふるさと〉の文化遺産化と観光資源化：京都府南丹市美山町「かやぶきの里」をめぐる」『龍谷大学社会学部紀要』44.
- 中村貴子, 2003, 「食文化型アグリビジネスの社会的意義：京都府美山町北集落を事例にして」『神戸大学農業経済』36, 61-68.
- 中村淳, 2007, 「文化という名の下に——日本の地域社会に課せられた二つの課題」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館, 2-36.
- 南丹市, 2010, 「年齢別人口集計表（平成22年4月1日現在）」, (2015年10月30日取得, [http://www.city.nantan.kyoto.jp/www/shisei/106/001/004/index\\_2058.html](http://www.city.nantan.kyoto.jp/www/shisei/106/001/004/index_2058.html)).
- , 2015, 「年齢別人口集計表（平成27年4月1日現在）」, (2015年10月30日取得, [http://www.city.nantan.kyoto.jp/www/shisei/106/001/004/index\\_20357.html](http://www.city.nantan.kyoto.jp/www/shisei/106/001/004/index_20357.html)).
- 根本祐二, 2013, 「『豊かな地域』はどこがちがうのか—地域間競争の時代」, 筑摩書房.
- 大田好信, 1993, 「文化の客体化——観光をととした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57(4): 383-410.
- 関谷龍子, 大石尚子, 2014, 「農村地域におけるソーシャル・イノベーターとしてのIターン者」『佛教大学社会学部論集』59: 25-47.
- 田中裕人・浅野耕太, 1999, 「農村宿泊施設に対する公的融資制度の厚生評価」『農村計画論文集』1, 175-180.
- 浮谷次郎, 2004, 「『挑戦』自治体(34)グリーンツーリズムとの連動で農林業振興を図る『日本の田舎』——京都府美山町」『ガバナンス』(35), 88-91.
- 湯川宗紀, 2006, 「町職員達の中から見た町おこし：京都府美山町の事例から」『佛大社会学』30: 1-12.
- , 2011, 「京都府旧美山町の観光事業への取り組み 町職員・地域住民双方の立場から」『佛大社会学』35: 12-23.

(ながみつ たいし)

佛教大学非常勤講師)